

頭脳循環を活性化する若手研究者派遣プログラム
ロンドン出張報告(平成 23 年 3 月 13 日～3 月 20 日)

島田周平

1. 来年度の学生派遣について

「アジア・アフリカ地域を理解するためのトライアングレーション・プロジェクト」のため、3月13日から20日にかけてロンドン大学東洋アフリカ研究科(SOAS)およびロンドン大学キングスカレッジを訪問し、本研究科の来年度の学生長期派遣に関する相談ならびに今後の長期的視点に立った受け入れ機関の検討調査を行ってきた。

SOAS では、来年度に派遣が予定されている飯田玲子さんの受け入れ条件について、飯田さんの指導教員である田辺明生教授と一緒に、受け入れ教員である S.ヒューズ博士と話し合った。その結果、客員研究生(Visiting Research Student)として学費支払いを条件に、正規の大学院生とかわらずゼミや講義に参加し聴講することが出来る身分が提案された。寮については別途申請が必要であるが、割安の宿泊施設の紹介がなされるということであった。

飯田さんが正式に大学院の客員研究生となるのは今年の9月から始まる学期を予定しているが、資格審査があるので正式な申請手続きをすぐにも始めなくてはならないとのことであった。

2. 2012年の学生派遣について

来年(2012年)に派遣を予定している南部アフリカ研究者の受け入れ先に関して、SOAS と King's College の研究者を訪問した。SOAS の研究者はサバティカルで会えなかったが、後者の研究者(Dr. D. ポッツ)と会い、学生受け入れの可能性について打診した。その結果、彼女は、南部アフリカ研究者であれば、喜んでチューターとなるとの了解を得た。

派遣学生が決まれば正式に手続きを始めなくてはならないのであるが、2012年の9月に始まる1学期に客員研究生として在籍するためには、来年この時期までには手続きを始めなくてはならないだろうとアドバイスを受けた。

3. 来年度以降の学生派遣について

来年度以降の学生派遣先として引き続き SOAS が第一候補として考えられるが、2ですでに述べたように、他の機関、1つは同じロンドン大学の King's College とブライトンにあるサセックス大学についても、状況を調査してきた。その結果、大学院の学費は、SOAS と大同小異で、いずれも学費は年間 10000 ポンドを超えている。またいずれの大学でも学期ごとの入学を認めており、1学期分の学費は年間の学費のほぼ 1/3 である。(多少高くなる大学もある)

また、いずれの大学も外国人学生向けの英語能力向上を目指した特別のコースを設けて

いる。たとえば SOAS では、専門科目(社会科学、人文科学、国際経営学)の履修を通して英語能力を向上させるという English Language and Academic Studies といったコース(9月、1月、4月入学で、期間は3、6、9ヶ月から選べる)を設置している。また、King's College でも English Language Centre において様々な英語教育プログラムを提供している。その中には、大学院の入学に際して必要な英語能力の向上を目指す、Pre-sessional courses や International Pre-master's Programme などがある。本プロジェクトは、若手研究者がイギリスの大学院に再入学することを援助する目的はない。しかし、総合的コミュニケーション能力の向上のためには役に立つプログラムかもしれない。しかし、これらの英語教育は、先に述べた客員研究生のための費用とは別に高額の授業料がかかるので、派遣学生は出発前に自分の目的にあった派遣計画をたてることが肝要である。

ところで、学費の他に宿舍の経費がかかる。どの大学も学寮を持っており、そこに宿泊出来る場合もあるが、必ずしも保障されているわけではない。サセックス大学の学寮の場合は100ポンド/週くらいからあるが、ロンドンではそれより高額(120ポンド/週以上)のようである。食費も考えるとロンドンでの生活費はブライトンにおけるそれよりかなり高額になる。

3. 再来年殿学生派遣について

再来年に派遣の可能性のある南部アフリカ研究者の受け入れ先に関して、SOAS と King's College の研究者に相談を試みたが、SOAS の研究者はサバティカルで会えず、後者の研究者(Dr. D.ポッツ)と相談することが出来た。正式に若手の派遣候補者が決まれば、受け入れの用意があるとの快諾を得た。

4. 派遣先について再検討すべき点

今回、久しぶりにロンドン大学を訪問し、学生の長期派遣について相手機関の研究者と相談する機会を持ったが、イギリスの大学の教育「産業」ぶりに戸惑いを感じさせられたというのが正直な印象である。SOAS や Kings College を訪問する前に、学術振興会ロンドン研究連絡センター所長平松幸三教授にお会いし、近年のイギリスにおける高等教育機関に関する全般的な説明を受けたのであるが、そこでもイギリスにおける大学間の競争の激化や、大学における授業料引き上げが、大きな話題になった。平松教授の説明は、私の印象とも一致するところがあり、ロンドン大学は、教育の場である前に、優良な教育「機関」であるべきと言う姿勢が一貫しているようにみえた。

今回久しぶりに訪ねた SOAS の図書館は、大げさに言えば昼食時の学食並みの混雑ぶりで、勉強するための机(その殆どはコンピュータ使用コンセントのある長机であるが)は常に一杯で、そこにありつけない学生の中には床に腰を下ろしてコンピュータを使っている状況すら散見され、かつて私が若かりし頃(1980年代初頭)の同じ図書館とは思えない状況になってきていた。学生数の増大、さらには様々な教育コース、プログラムの展開の影響が

現れているようである。

このような状態で、世界最高水準の学費を取ることが可能なのは、教育水準評価で高い評価を受けていること(Kings College の案内書では世界の上位 25 位に入っていることが書かれている)、そして英語の「力」のお陰であろう。本プロジェクトの目標の 1 つが、総合的コミュニケーション能力や地域間比較能力の向上にあることを考えれば、本プロジェクトによる派遣先としてイギリスが有力候補であることは否定できない。

しかし、先月科学研究費の出張で訪問する機会があったドイツとオランダにおける大学院の教育研究環境は、私が見る限り、教育水準での優位性は明確ではないが、少なくとも物理的環境から言えば、イギリスより余程恵まれている印象を受けた。それは単に教育費が安いと言うことのみならず、本研究科が目指しているフィールドワークを重視した地域研究の成果の公表能力の向上といった点からもより適切でないのか、と考えさせられた。

この点は、2012 年度以降の学生派遣に際して再検討するには時間が足りないかもしれないが、根本的に見直すに値することであるように思った次第です。



JSPS 所長平松幸三教授との情報交換



SOAS の S.ヒューズ博士と学生の受け入れについて相談